**聖霊降臨節第23主日　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　2024年10月20日**

**「聖霊に促されて」**

**箴言5章21節**

**5:21 人の歩む道は主の御目の前にある。その道を主はすべて計っておられる。**

**使徒言行録20章13～16節**

**20:13 さて、わたしたちは先に船に乗り込み、アソスに向けて船出した。パウロをそこから乗船させる予定であった。これは、パウロ自身が徒歩で旅行するつもりで、そう指示しておいたからである。**

 **20:14 アソスでパウロと落ち合ったので、わたしたちは彼を船に乗せてミティレネに着いた。**

 **20:15 翌日、そこを船出し、キオス島の沖を過ぎ、その次の日サモス島に寄港し、更にその翌日にはミレトスに到着した。**

 **20:16 パウロは、アジア州で時を費やさないように、エフェソには寄らないで航海することに決めていたからである。できれば五旬祭にはエルサレムに着いていたかったので、旅を急いだのである。**

1.

**先週は私たちが祈りを持って備えて来た伝道集会を主の祝福の内に行うことができました。大澤秀夫先生をお招きして朝の礼拝と午後の講演会でお話をしていただきました。多くの恵みをいただいたお話でありました。私は講演会の後の質疑応答で先生がお子様の御病気を経験されたことでイエス様の十字架の死と復活を自分の言葉で受け止め直すことができた、牧師として歩むその歩みの転換点となったとおっしゃられていたのが大変印象に残っています。先生が体全体使って神様の愛を現わしておられる、もっといえば先生の存在そのものが神様の愛を現わしておられる、先生のお姿そのものが福音であり伝道であるのはそういったご経験があるからこそなのだなぁと思わされました。**

**今私たちは使徒言行録から共に御言葉を聞いています。特にパウロが3度の伝道旅行に行ったことが記されている13章以下はパウロの姿とその伝道の働きを読み進めています。**

**これは個人的な感想になってしまうのかもしれませんが、もしかしたらパウロって大澤先生に似ているところがあるのかなと思いました。イエス様の十字架と復活を身を持って経験して、自分の言葉で受け止め直して、全身で福音を語る。それはパウロの存在そのものが福音であり伝道である。今日の聖書箇所の説教準備をしていて何かパウロと大澤先生の姿が重なってくるような気がしました。そして何もそれは大澤先生やパウロだけでなくて、私たちの誰もがその存在を通して、私たちの存在そのものがイエス様の十字架と復活の神様の愛を現わしているのです。**

**パウロの第3次伝道旅行も終盤に入りました。エルサレム教会に献金を届ける為に、パウロはエルサレムに向かいます。さらにその先はローマに、さらにはイスパニアにパウロの伝道の思いは熱く燃えているのです。そして、それぞれの町での滞在が「もう二度と会えない」最後の別れになることをパウロはよくわかっていたので、トロアスでの礼拝の説教がついつい長くなり、居眠りをしてしまったエウティコが窓から落ちて死んでしまったけれども神様が生き返らせてくださった出来事がありました。そのトロアスを後にしてミレトスまでの道のりが非常に詳しく記されています。13節から15節までの詳しい記述は巻末の地図の８パウロの伝道旅行の点線の道筋です。トロアスからアソス、ミティレネ島、キオス島、サモス島、そしてミレトスに到着しました。16節を見ますと、「できれば五旬祭にはエルサレムに着いていたかったので、旅を急いだのである。」とあります。五旬祭、ペンテコステです、使徒たちに聖霊が降り教会が誕生したあのペンテコステを祝う祭りの日までにはパウロはエルサレムの教会に集めた献金を届けたかったのです。**

**それは一説によりますと、パウロが各地で立てた異邦人教会からのエルサレム教会への献金ですが、エルサレム教会のユダヤ人の中には異邦人教会に対してあまり良い思いを持っていない人もいたそうです。だからこそ、この地上に教会が誕生したペンテコステの日、福音がエルサレムだけでなく世界中の言葉で語られ、世界中の民が共に主を礼拝する時が来る「主の名を呼ぶ者は皆救われる」この幻を与えられたこの日を記念する祭りの時であれば異邦人教会からエルサレム教会への献金を受け取ってもらえやすいとパウロは考えたからこの祭りの時までにはエルサレムに行きたいと旅を急いでいたというのです。**

**パウロはエルサレムへの旅を急いでいた。ここで一つ疑問に思うことがあるのです。この後パウロはエフェソの教会の長老たちをミレトスに呼び寄せて別れの挨拶をします。涙ながらに別れを惜しむ、とても感動的な場面です。でも、それほどまでにパウロが急いでいるならなぜわざわざエフェソの長老たちを呼び寄せて別れの挨拶をしたのかと思うのです。ミレトスからエフェソまで50キロほど離れていて3日はかかると言われています。その時間を短縮するためにミレトスからすぐにエルサレムに行くことはできたはずなのです。**

**16節前半はちょっと考えると不思議な文章です。「パウロはアジア州で時を費やさないように、エフェソには寄らないで航海することに決めていたからである。」この文章ってなくても意味は通じるのです。15節「更にその翌日にはミレトスに到着した。」16節「できれば**

**五旬祭にはエルサレムに着いていたかったので、旅を急いだのである。」これだけで、ああ、パウロは旅を急いでミレトスに行ったんだなとわかります。でも、16節にはあえて「エフェソには寄らないで」と書いてあるのです。エフェソのことは書かないでいいのにエフェソのことが書いてある。**

**実はここにパウロの熱い思いがあるのです。パウロはエフェソに寄りたかったのです。本当はトロアスからアソス、そしてエフェソに寄ってミレトスに行きたかったのです。早くエルサレムには行きたい、けれどもエフェソにも本当は行きたい。でもエフェソに行ったら想いが強すぎてエフェソの教会で長居してしまうのは目に見えている。そんなことをしたら五旬祭に間に合わなくなってしまう、そのジレンマの中でパウロはエフェソの教会の長老を呼び寄せて別れの挨拶をするという選択をしたのです。**

**パウロにとってエフェソという町は思い入れのある特別な町でした。第2次伝道旅行の終わり近くでもパウロはエフェソに寄っています。本当はもっと早く行きたかったのですが聖霊によってまたイエス様の霊によって阻止されて聖霊に導きでマケドニアへ、つまりヨーロッパに伝道に渡りました。その伝道旅行の終わりにパウロはようやくエフェソに行きました。18：19～21です。**

**「18:19 一行がエフェソに到着したとき、パウロは二人をそこに残して自分だけ会堂に入り、ユダヤ人と論じ合った。**

 **18:20 人々はもうしばらく滞在するように願ったが、パウロはそれを断り、**

 **18:21 「神の御心ならば、また戻って来ます」と言って別れを告げ、エフェソから船出した。」**

**あれほど行きたいと願ったエフェソですが、パウロはエフェソの人々がもっといて欲しいと願ったのに「神の御心ならば、また戻ってきます」と言って旅立ちました。この時は滞在が御心ではないと判断したのでしょう。そして第3次伝道旅行でパウロは陸路でエフェソに到着しました。このエフェソでも大きな迫害を受けるなどいろんなことがありましたが、3年間滞在してイエス様の十字架と復活の福音を語りました。そしてその中でエルサレム行きが示されたのです。3年の滞在はパウロの伝道旅行中最も長い滞在です。その長い滞在の中でパウロはエフェソの教会にやはり特別な思いがありました。それはこの後の別れの挨拶を読めばよく分かります。こんなに長々と別れの挨拶を記している箇所はありません。**

**「神の御心ならば、また戻って来ます」第2次伝道旅行の時はそう言いましたが、今回の伝道旅行では「また戻ってきます」はないことがパウロによく分かっていました。「また」はないのです。そして、それが神様の御心であることがパウロにはよくわかっていたのです。**

**22節に「そして今、わたしは、“霊”に促されてエルサレムに行きます。」と言っています。「霊」とは「聖霊」です。聖霊に促されて、聖霊に導かれて今エルサレムに行くのです。エルサレムに行くことも、エフェソには寄らないで急いで行くことも、エフェソの長老たちを呼び寄せて別れの挨拶をすることも、一見パウロが自分で立てた計画で進めているようなのですが、それはパウロだけの思いではなくてそこには聖霊の導きがあることがよく分かっていたのです。それは今までの伝道旅行が最初から聖霊の導きで進められたのであり、パウロの思いで次はここに行ってどのくらいいて、その次はあそこに行ってという旅行ではないことがパウロには十分わかっていたのです。この旅は伝道の旅路である、聖霊に導かれた、聖霊と共に歩む伝道の旅路であることがよく分かっていたのです。**

**それは今日の旧約聖書の言葉で言いますならば、**

**「人の歩む道は主の御目の前にある。その道を主はすべて計っておられる。」**

**主がご計画された道であるのです。自分判断して歩いているようだけれども、神様が前もって定められた道を、聖霊に導かれた、聖霊と共に歩むのです。**

**先日、平日の朝にある女性の方が教会を訪ねてこられました。「こちらの教会の礼拝に出たいのですが。車はどこに止めればいいでしょうか。」私は日曜日は宮坂医院の駐車場をお借りしているのでそこ止められることと、牧師館駐車場に止められることをお伝えしました。**

**平日の朝、行ったことのない教会を訪ねるのは相当の勇気が必要だったと思います。牧師はいるだろうか。どんな牧師が出てくるだろうか。怖い牧師か優しい牧師か。丁寧に対応してもらえるだろうか。もしつっけんどんな対応をされたらどうしよう。色んな不安があったと思います。それでも勇気を振り絞ってインターホンを押して、牧師と会って自分の思いを伝える、これってその方が自分一人で行っているのではなくて聖霊の促しがあると思います。聖霊に背中を押されて、聖霊に導かれて教会に導かれたのだと思うのです。**

**それは、私たち皆が同じです。今私たちはこうして共に諏訪教会で礼拝を守っています。生まれたところも違えば、育った環境も違います。ここ諏訪で生まれた人もいれば、他の場所から移ってこられた方もいます。そして、教会に通うようになった理由も人によって様々です。親の手に引かれて子どもの頃から教会に通っている人もいれば、ある程度年齢を重ねてから人生の様々な歩みの中で困難を覚えて教会に導かれた人もいます。「疲れた者、重荷を負う者は誰でも私のもとに来なさい、あなたがたを休ませてあげよう」とのイエス様の招きの言葉に導かれてやっとの思いで教会の門を叩きくぐった人もいるでしょう。そして、教会生活を送る中で、イエス様の十字架と復活がこの罪深い私の罪を赦すためだとその愛に気づかされて、「イエスは救い主」との信仰の告白に導かれて洗礼に導かれて今こうして共に教会生活を送り、共に礼拝を守っている方も多くおられるのです。また、今は洗礼は受けていないけれど、救いの道を求めている方もおられます。**

**私たちは、考えてみれば自分の意志で教会に行くようになったのではなくて、実はそこに神様の導きがあり、聖霊の導きがあるのです。神様がその道をご計画して下さり、備えて下さっているのです。その導きの中で今も私たちは共に教会生活を送り、共に御言葉に聞いて祈り、御言葉をそれぞれの置かれた場所で実践をしているのです。また私たちのそれぞれの置かれた場所もそれぞれの歩む道も私たちが自分で選んでいるのではなくて、神様が備えていてくださり導いて下さっているのです。たとえその道がどんな困難な道に思えても、そこには神様のお導きがあるのです。私たちはこれからも神様の導きの中で、イエス様と共に歩み、イエス様の十字架の死と復活のその愛によって生かされている喜びを私たちの存在そのもので証しをしていくのです。**